

機関番号：13101

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20791724

研究課題名 (和文)

新生児の簡易式行動評価スケールの開発—母親が育児に対する自己効力感をもつために—

研究課題名 (英文)

Development of the simple-style behavioral assessment scale of the newborn baby

研究代表者

石田 真由美 (ISHIDA MAYUMI)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号：40361894

研究成果の概要 (和文)：

母親が簡単にそして気軽に我が子の行動評価をおこない、育児に対する自己効力感をもつことができるようなスケールの開発をすすめることを研究目的とした。出生直後の母子接触の場面において参加観察法を用いて新生児の行動データ収集をおこなった結果、パターンが多様であり、スケールを一般化するには出産背景や新生児の生体反応などのデータを組み合わせ、さらにデータ収集をしていく必要があるという結果を得た。

研究成果の概要 (英文)：

Mother performed the behavioral assessment of her child easily and willingly, and did that she could go ahead through the development of the scale that could have a feeling of self-effect for the child care with a study purpose. As a result of having performed the behavioral data collection of the newborn baby using participation observation law in a scene of the mother and child contact just after the birth, patterns were various and put data such as the vital reaction of a delivery background and the newborn baby together to generalize a scale and got a result that it was necessary to do data collection more.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：新生児，行動評価，愛着形成

1. 研究開始当初の背景

(1) 時代背景

2001年、厚生労働省と文部科学省が母子保健の国民運動計画として『すこやか親子21』を掲げた。その中に「安心して子どもを産み健やかに育てるために妊娠・出産に関する安

全性と快適さの確保」と「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」が謳われている。母子保健は生涯を通じた健康の出発点であり、次世代を健やかに育てるための基盤となる。『健やか親子21』がスタート後、子育てにやさしい地域づくりや支援体制の

整備などが見直されてきており、2005年におこなわれた中間評価において、具体的な取組方策を掲げた行動計画を策定し『健やか親子21』の更なる推進が期待されている。

1980年代以降、親と子のきずなに関する研究がはじまり、その重要性が述べられてきている (Marshall H. Klaus & John H. Kennell, 1982, 他)。しかし、これまで医療者の介入方法や母親の心理に焦点をおいた研究が多くみられ、新生児の行動評価そのものに焦点をおいた研究は極めて少ない。したがって、本研究は我が国の母子保健の発展に意義のある新しい研究であると考えられる。

(2) 研究動機

これまで、母子間の愛着形成を促進し妊娠・出産期を楽しいとすることが出来るためのウェルネス看護の必要性和重要性を感じ、研究を進めてきた (平成16年度～18年度 科学研究費補助金・若手研究(B)『母性領域のウェルネス看護診断の構築に向けて』課題番号:16791377)。この期間にポジティブな感情に働きかける支援をおこなうことは母性意識の向上に重要な役割を果たすと考え、この研究により、母親への看護支援・方策について考察することができた。

しかし、看護者が支援をおこなうだけでなく、母親や新生児自身が本来もつ反応・能力をお互いが引き出し合うことにより、母子の相互作用が働き愛着形成が強まる点に注目し、今回新生児の行動評価に研究主眼をおいた。

新生児の能力や反応の行動評価法としては、ブラゼルトンによって開発された新生児行動評価 (Neonatal Behavioral Assessment Scale ; NBAS) がある。これは、医療分野だけでなく教育・心理学領域においても検査・診断、研究のための評価手法として広く認められている。NBASは検者が新生児の行動観察をおこない、その新生児の“best performance”を評価する。同時に、その場面に親が参加することにより、子どもの個性や特性の理解を深め、親子の相互作用が強化された上で育児をおこなうことができると考えられている。しかし、この行動評価は項目数が多く、複雑で、評価技術も求められる。そのため、検者はトレーニングを継続し専門課程を修了することが求められており、実施は容易ではない。そこで今回、トレーニングを受けた検者がおこなうのではなく、母親が気軽に我が子の行動評価ができるスケールの作成が求められるのではないかと考えた。

母親自身が新生児の行動を評価し、我が子の特性・個性を知ることは、母親の育児に対する自己効力感をもつことにつながると考えられ、また、育児に対する自己効力感をもつことで自信を得ることができ、育児を楽し

み、充実した子育て期間を過ごすことができると考えられ、『健やか親子21』の目標達成の一助となり得ると考えられる。

2. 研究の目的

母親が簡単にそして気軽に我が子の行動評価をおこない、育児に対する自己効力感をもつことができるようなスケールの開発をすすめることを研究目的とした。

そして、出産直後の母子ケアに最も関わる助産師や看護師が、このスケールを入院中の保健プログラムに導入することにより、母子愛着形成の促進を図ることが出来ると思える。

3. 研究の方法

(1) 文献収集と文献レビュー

新生児の行動評価に焦点をおいた研究や、母親の育児に対する自己効力感に関する文献収集をおこない、行動評価のスケールと成り得る反応・要素を抽出することとした。また、母子の愛着形成に関する文献レビューをおこない、愛着の評価の指標、愛着形成に影響を及ぼす要因について考察した。

さらに、分娩直後の母子の早期接触に関する文献収集をおこない、その効果や評価の指標・愛着形成に影響を及ぼす要因について考察した。また、出生直後の新生児の行動評価のスケールと成り得る反応・要素の再確認をおこなった。

(2) 助産師のインタビュー

母親の育児に対する自己効力感を高めるための要素となり得る条件について抽出するため、施設助産師と開業助産師の経験をもつ助産師5名を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。

インタビューは1時間程度実施し、得られたデータから逐語録を作成し、質的分析により重要カテゴリーの抽出をおこなった。

(3) 行動評価指標の洗練化

新生児の行動評価や、それに関連する母子間の愛着形成について、様々な領域の専門家から助言をもらい、医学的視点・生理学的視点・心理学的視点から行動評価指標の洗練化をおこなった。

(4) データ収集

① 新生児の行動 :

出生直後の新生児の行動評価のスケールと成り得る反応・要素について抽出するため、出生直後の早期母子接触の場面において、参加観察法を用いてデータ収集をおこなった。

データは、分娩室において2台のビデオカ

メラを用いて収集した。うち1台は母親の頭側から45度の位置に三脚固定のうえ設置し、もう1台は研究者が持ち固定ビデオカメラの反対側から撮影した。

撮影内容は、新生児の行動(動き・しぐさ・表情など)とそれに対する母親の反応、母親の行動(タッチング・声掛け・表情など)とそれに対する新生児の反応とした。

②母親のインタビュー：

出生直後の新生児の行動データを、出産後2～3日目に母親とともに視聴し、その際の思いや感情を語ってもらった。

(5)分析方法

新生児の行動データと母親のインタビューデータは、それぞれ質的帰納的に内容分析をおこなった。新生児の行動データは、フィールドノートに時系列に行動を記録化し、得られたデータの内容解釈と関係づけをおこない、カテゴリー分類をおこなった。それらの現象についての概念化を図り、解釈的枠組みを多面的に補強するため母親のインタビューデータを用いた。

(6)倫理的配慮

本研究は、新潟大学医学部の倫理審査の承認を経て実施した。

4. 研究成果

(1)文献収集と文献レビュー成果

行動評価のスケールと成り得る反応・要素の抽出と、愛着の評価の指標、愛着形成に影響を及ぼす要因について考察した結果、児の反応・成長の過程を見ながら児と関わっていくことで、母親としての役割を見出し、児に対して愛着を深めることにつながっていくと考えられ、母と児の両方を研究対象として進めていくことが必要であると確認できた。

さらに、分娩直後の母子の早期接触の効果や評価の指標・愛着形成に影響を及ぼす要因について考察し、出生直後の新生児の行動評価のスケールと成り得る反応・要素の再確認をおこなった結果、研究方法として参加観察法を用いることや、観察時間についての手法について、科学的な根拠をもとに見直しが必要であると確認できた。その後、研究方法の再考をし、内容を一部修正した。

(2)助産師のインタビュー

施設助産師と開業助産師の経験をもつ助産師のインタビューデータより、母親の育児に対する自己効力感を高めるためには、『分娩時の環境調整』、『対象が納得いく分娩』が重要ではないかという見解を得た。

(3)行動評価指標の洗練化

新生児の行動評価や、それに関連する母子間の愛着形成について専門家から助言をもらい、行動評価指標の洗練化に向けて検討した。

①医学的視点

新生児の行動評価指標の洗練化を図るための助言を得、既存の評価スケールを参考にしながら、評価視点を再考していくことが必要となるのではないかという考察ができた。

②生理学的視点

母子間コミュニケーションのメカニズムについて研究をおこなっている専門家に、新生児の行動評価指標の洗練化を図るための助言を得た。行動評価の際に、新生児の視覚・聴覚・触覚を含めた評価法を用いていくことが基本となるのではないかという考察ができた。

③心理学的視点

母子の愛着形成に関するこれまでの研究成果や、新生児が生まれながらにもつとされる能力について助言を得た。出生直後に焦点を置いた研究はこれまで困難であり、助産師という専門職を生かしたデータ収集や観察視点が見込まれるという示唆を得た。

(4)データの整理

①新生児の行動

出生直後の早期母子接触の場面において、参加観察法を用いてデータ収集をおこなった結果、新生児の行動として、『母親と接触している間は啼泣がみられない』『母親と視線を合わせようという動き』『落ち着きとモゾモゾとした活動を繰り返す』などがみられた。

また、その新生児に対する母親の反応として、『児に触れるというより包み込むような仕草』『児の反応を見逃さないようにずっと見つめる』という見守りのような行動がみられた。

②母親のインタビュー

出生直後の新生児の行動データを母親とともに視聴し、その際の思いや感情を語ってもらった。その結果、『とても温かく感じた』、『かわいいと思った』、『児が生きている実感がわいた』、『お腹の中での発育を思い出した』、『この上ない喜びを感じた』、『安心感をおぼえた』というデータが得られた。

新生児の行動の意味や解釈といった内容というよりも、無事に出産を終えたという実感や安心感といった内容のデータが多かった。母親の児への愛着形成については示されたものの、出生直後の段階では今後の育児に向けての自己効力感に至るような結果は得られなかった。

(5)分析結果

新生児の行動データを既存の評価スケール

ルを参考にし、カテゴリーに分類しながら評価視点を再考し分析していったが、パターンが多様であり、新生児の行動評価スケールを一般化に向けて作成するには出産背景や新生児の生体反応などのデータを組み合わせ、様々な状況下でさらにデータ収集をしていく必要があるという結果を得た。

(6)今後の課題

本研究のめざすところは、出生直後の母子ケアに最も関わる助産師や看護師とともに、スケールの有効性と現場への適用可能性を確認し、入院中の保健プログラムに導入することである。そのためにも、スケールの項目や信頼性・妥当性を高めるために、さらにデータを積み重ねて検討していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

6. 研究組織

(1)研究代表者

石田 真由美 (ISHIDA MAYUMI)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号 : 4 0 3 6 1 8 9 4